

命を救う

～進化する救急搬送～

津市長 前葉 泰幸



救急医療において、救急車内での的確な処置と医療機関への迅速な搬送は命に直結する最重要課題です。

津市では、命を救うための準備や処置を一刻も早く始めるしくみが、専門医師と医療関係者の献身的なご尽力により構築されてきています。

津市のすべての救急車に心電図を搬送先の病院に伝送するシステムを導入したのは平成25年秋のことです。受け入れ先として3つの病院(三重大学病院、三重中央医療センター、永井病院)が循環器の輪番体制を整えてくださいました。日本人の死亡原因は心疾患がガンに次ぐ第2位であり、その多くを占めるのが心筋梗塞です。血管が突然詰まり心臓の筋肉が急速に壊死していくため、発症から血流再開までの時間が生死に直結します。心筋梗塞の診断に優れた12誘導心電図などのデータを救急車側と病院側がリアルタイムで共有することにより、専門医は緊急治療の要否を判断して受け入れ準備を進めることができます。県内では唯一津市のみでの取り組みですが、病院到着から治療完了までの時間は30分程度短縮され、重症化の防止と救命率の向上につながることを実証する結果が出ています。

たとえ深夜であっても必ず緊急開腹手術ができる体制も新たに構築されました。今年4月より4病院(三重大学病院、三重中央医療センター、遠山病院、永井病院)が専門医師を確保し当番の二次救急病院をバックアップしています。当番病院が虫垂炎や消化管穿孔など緊急開腹手術が必要な患者に対応できる状況にない場合、救急車は患者を緊

急開腹手術ができる医師が待機する病院へと搬送します。

さらに、多くの医療機関が休診となり救急搬送が増加する土曜日午後からの時間帯(14時～22時)にも4病院(遠山病院、武内病院、吉田クリニック、榊原温泉病院)のご協力のもと二次救急病院を補完する輪番体制を10月に創設するなど、津市の救急医療の課題解決に向けた取り組みを進めています。

初期の救急救命処置も、より迅速で効果的に実施できるよう進化しています。傷病者のもとに駆けつけた救急救命士が医師の指示のもとに行うことができる特定行為と呼ばれる処置は、従来、心肺機能停止後に限られていました。平成24年、処置範囲を拡大する実証研究が行われることになった際、率先して応募した津市消防は、全国39の対象地域に選ばれました。平成26年、救急救命士法が改正されると、津市では三重県内他地域に先駆け運用を開始し、特別な訓練を受けた救急救命士が医師の指示のもとで糖尿病など低血糖による意識障害が疑われる場合にはブドウ糖溶液を投与し、重度傷病者に対しては心肺停止前の静脈路の確保や輸液を行っています。以来、搬送途中に意識が改善した、後遺症なく退院できたなどといった奏功事例が数多く報告されており、隊員の救急救命への熱意が数字にも表れてきています。

今年6月からは、救急隊員の再教育病院実習の一環として、三重大学医学部附属病院救命救急センターに高規格の救急車と救急救命士3名を派遣し、医師が同乗して出動することもできる救急ワークステーションを開始しました。救急救命士のさらなる知識と技術の向上はもとより、医療スタッフと救急隊との信頼関係を構築することで、救急現場におけるスムーズな連携を目指します。

これからも、地域医療を支える関係者のご協力のもと、命を救うためのより高度な救急搬送体制を整えてまいります。

「TV版市長コラム」では、前葉市長がこのテーマについて語ります



津市長コラム

検索

市長の活動日記から



✓ミッキー＆ミニーマウス来訪…10月7日

市長室で、3年ぶりにミッキーと再会。東京ディズニーシー開園15周年記念パレードが津まつりに華を添え、子どもたちの笑顔がはじけました。



✓全国歴史研究会「第32回全国大会 美しい国・三重大会」(ホテルグリーンパーク津)…10月21日

県内初となる全国大会が、3日間の日程で開催されました。全国から会員が集い、三重の歴史を通じて、津市の魅力をPRする絶好の機会となりました。

「市長活動日記」は津市ホームページでご覧になれます

津市長活動日記

検索